

幼児の学びをいかす保育実践

1 幼児期の子どもに見る思考力・判断力・表現力の発達

幼稚園教育の目的は、その後続く小学校教育や中学校教育の基礎を培うことであり、そのための幼児教育の基本として、幼児期に固有の発達の特性を踏まえ、子どもに相応しい生活が展開できるように子どもを取り巻くさまざまな生活環境を整えていくことが求められている。そして、心と身体が互いに密接に関連し合って発達していくことに留意しつつ、子ども自身の環境に対する主体的で能動的な関わりを促していかなければならないのである。幼児教育において（あるいは「幼稚園教育の基本として」）「遊び」が重視されるゆえんはここにある。

子どもにとって遊びとは環境との相互作用のもとでなされる心身の発達全体に関わる総合的な学び活動であり、遊びの中では「思考力」「判断力」「表現力」も包括的に、あるいは相補的に現れ、発達していく。その意味で、幼児の成長の中でこれらの力を個別的分析的にとらえることは難しく、子ども自身の遊びが育っていくことがこれらの力の発達の証しとしてとらえていくしかないのもまた事実である。

このことを踏まえたうえで幼児にとっての三つの力をあえて「定義」するなら、「思考力」「判断力」とは環境からはたらきかけを受けて、子どもの内部に生起し展開していく力であり、「表現力」とは、逆に、子どもの中にある力が何らかの様態で環境へとはたらき掛け、子ども自身と環境との関係性を高め深めていく力であるといっておくべきであろう。このように考えるなら、幼児の「思考力」「判断力」を育てていく契機となるものは何よりも環境への興味関心あるいは知的好奇心であり、「表現力」を育てていく契機となるものはそこから得た驚きや不思議さという心の動きに基づく環境への能動的な働き返しであろう。この両者が途切れることなく循環的に展開していくことによって、子どもの「自ら考える力（思考力）」「工夫していく力（判断力）」「思いを伝え合う力（表現力）」が育っていくのである。

2 幼児期の子どもに見る学び合いの姿と学びをいかす保育の方法

保育者の重要な役割はこの循環性を自然な形で確保することであり、より具体的には、子どもたちが「学び合う」環境を構成し子どもたちの遊びを育てていくことである。

「学び合い」とは、子どもたちがそれぞれの考え工夫した結果をお互いに伝え合い、それが契機となってさまざまな事象に対して新たな興味関心や発見、驚きといった心情を生み出していくような一連のプロセスである。そして、その発見や驚きを手がかりに子どもたち自身がまた新たな遊びや活動を生み出していくことが「学びをいかし」ている姿だと考えられる。

子どもたちの間に「学び合う」関係が成立するためには、なによりも子どもたちがそれぞれの経験（体験）を共有化し共通化することが必要になる。そのために、保育者が目の前にいる子どもたちの興味関心のありかを適切に把握し理解することが求められる。本年度の実践事例からするとそれは周りの自然や生き物と関わる活動（遊び）ということになる。この年頃の子どもたちにとっては、自然の動植物は大変興味のある“遊び素材”でもある。生き物はただそれだけでも変化していく存在であり、誕生から死に至るまでのさまざまな姿を見せてくれるとともに、多くの感動を子どもたちに与えてくれる。子どもたちは刻々と変化していく環境に興味や関心を抱く。他方で、そこで子どもたちが抱く興味関心や感動はそれぞれに違いがあり、その違いが、子ども同士の「学び合う」関係を阻害する要因となる場合もある。そのために、子どもたちの中にこれまでの経験をたえず意識化し共通化させていくための保育者からの意図的なはたらきかけや、子ども一人一人のさまざまな気付きを適切に取り上げていく保育者の姿勢が必要となってこよう。実践事例においては、このような保育の一端を垣間見ることができる。

子どもの「学びをいかす」ことが子どもの遊びを育て、遊びが育つことによって「学び」も育っていくのである。（共同研究者：島根大学教育学部人間生活環境教育講座、西田 忠男）